

一般演題（口演） | 一般演題（口演）：口腔機能

2025年6月29日(日) 14:30 ~ 15:20 第2会場（幕張メッセ 国際会議場 105）

口腔機能3

座長：松原 ちあき（静岡県立大学短期大学部 歯科衛生学科）

15:10 ~ 15:20

[O-3-20] 義歯装着の有無が新規咬合力計の結果に及ぼす影響

○丸山 詩央¹、吉川 峰加¹、高橋 優太郎¹、野田 健史郎¹、丸山 真理子³、春田 梓¹、竹内 真帆³、香川 和子²、横井 美有希⁴、山澄 尚太⁵、續木 アナスタシア⁵、小瀬木 美香⁵、森 由香里⁵、櫻井 薫⁵、小林 健一郎⁵、吉田 光由⁴、津賀 一弘¹ (1. 広島大学大学院医系科学研究科先端歯科補綴学、2. 広島大学病院咬合・義歯診療科、3. 広島大学病院口腔インプラント診療科、4. 藤田医科大学医学部歯科口腔外科学講座、5. こばやし歯科クリニック)

【目的】 JMS咬合力計（OBM-01プロトタイプ、ジェイ・エム・エス、広島）は、片側で物体を噛み潰す際の咬合力を簡便に測定するために開発された。本研究では、義歯装着の有無という口腔環境の違いが、GCデンタルプレススケールII（DP II、ジーシー、東京）と同様にOBM-01プロトタイプにおける咬合力に対しても影響を及ぼすか否かを明らかにすることを目的とした。【方法】 京都先端科学大学における高齢者を対象とした調査または新規咬合力計の基準値に関する研究への協力が得られた自立して生活を送る高齢者を対象とした。年齢、性別、歯式、最大咬合力として、OBM-01プロトタイプを用いた習慣性咀嚼測の咬合力とDP IIを用いた総合咬合力を評価項目とした。正規性の検定（Shapiro-Wilk検定）、Mann-Whitney U検定およびSpearmanの順位相関係数の統計学的検討にSPSS Ver. 28.0

（IBM Corp., USA）を用いた。【結果と考察】 義歯装着（D）群は134名（男性27名，81歳，女性107名，80歳），義歯非装着（ND）群は209名（男性30名，78.5歳，女性179名，76歳）であった。OBM-01プロトタイプの咬合力は，D群で男性295.0 N，女性195.0 Nであった一方，ND群は男性で562.5 N，女性で484.0 Nだった。DP IIの総合咬合力は，D群において男性708.0 N，女性443.7 Nだった一方，ND群では男性1321.1 N，女性818.6 Nとなった。（すべて中央値で表記）ND群と比べてD群の方が，男性より女性の方が各機器において低値を示した（ $P<0.05$ ）。義歯の有無に関わらずOBM-01プロトタイプとDP IIで有意な相関関係を認めた（ $P<0.05$ ）。OBM-01プロトタイプを使用する際，咬合させる部分へ確実に第一大臼歯が設置できない場面もあり，咬合部位の設置に関するさらなる検討を行う。

（COI開示：なし）（京都先端科学大学倫理委員会#24M02，広島大学疫学研究倫理審査委員会E2023-0302）